SERIES

2025.05.28

【前編】海に潜り、原始的な感覚にチューニングを合わせて / 連載「作家のB面」Vol.33 鈴木ヒラク

アーティストたちが作品制作において、影響を受けてきたものは？　作家たちのB面を掘り下げることで、さらに深く作品を理解し、愛することができるかもしれない。連載「作家のB面」ではアーティストたちが指定したお気に入りの場所で、彼/彼女らが愛する人物や学問、エンターテイメントなどから、一つのテーマについて話を深掘りする。

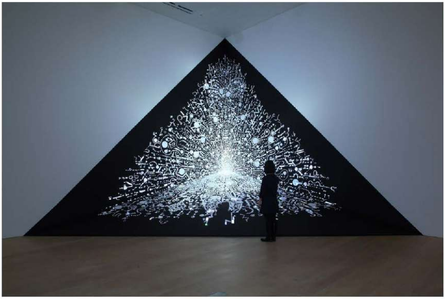
Photo / Saki Yagi
Text / Yu Ikeo
Edit / Eisuke Onda
Illustration / sigo_kun

訪れたのは銀座、鈴木ヒラクさんの「海と記号」展が開催中のポーラミュージアム アネックスだ。都市の喧騒からうって変わり、会場には、仄暗い海の底を感じさせる静寂が広がっていた。今展覧会のテーマであり、ヒラクさんにとっての特別な場所でもあるという海。幼少時から続けているという素潜りや原体験としての海についてうかがった。

三十三人目の作家

鈴木ヒラク

「描く」と「書く」の間を主題に、空間や時間に潜在する線を探求し、ドローイングの概念を拡張する制作活動を展開。表現する媒体は、平面、彫刻、映像、インスタレーション、パフォーマンス等と幅広い。



《道路》2010年 反射板、ミクストメディア 600x600x600cm 森美術館での展示風景 Photo by Keizo Kioku © Hiraku Suzuki Studio

個展『今日の発掘』2023年 群馬県立近代美術館での展示風景 Photo by Ooki Jingu © Hiraku Suzuki Studio

ライブ・ドローイング・パフォーマンス（鈴木昭男とのセッション） 2019年 東京都現代美術館「MOTアニュアル2019 Echo after Echo：仮の声、新しい影」イベント Photo by Sepideh Hashemi © Hiraku Suzuki Studio

素潜りに装備はいらない

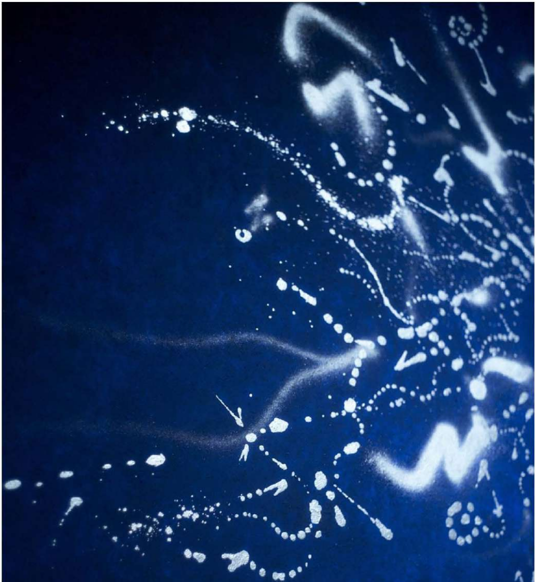
ポーラミュージアムアネックスの前で鈴木ヒラクさんと待ち合わせ

ーー今回の展覧会のテーマは海ですが、ヒラクさんは素潜りがお好きだと伺っています。

素潜りは子どもの頃から大好きです。今も続けていて、もう僕のこと「素潜り」って呼んでもらってもいいくらい（笑）。

ーーライフワークとして潜られているのですか？

趣味というか、生きがいの一つですね。5歳のときに、親に連れられて素潜りしたのが始まりで、それ以来、良さそうな場所があったら潜ってみるという感じで、今に至ります。日本では伊豆や福岡の海が多いです。海の中って浮力もあるし、そこにある地形や生き物などによって織り上げられている世界の秩序が、地上のそれとは全く違う。はじめて潜ったときの、世界がパッと広がった瞬間の感覚を今も覚えています。世界というのは地上のルールだけで動いているんじゃないんだ、って。



ーー潜るという行為ならスキューバダイビングなどもありますが、素潜りにこだわる理由は？

なるべく少ない装備の方がいいなというのがあって。過去にはサーフィンなども試したんですが、やっぱり自分は、なるべく道具を身につけないで自然の中に入っていきたいなと。さすがに寒いときにはラッシュガードを着ますが、基本は海パンとシュノーケル。手袋も外して。人がいない場所ならば全裸で、ということもあります。最近の個人的な流行りは裸眼ですね。最初は視界がぼやけますが、続けているうちに解像度が上がってきます。

ーー裸眼で素潜りとは……。装備を軽くすればするほど危険も増えそうですが。

実際、何度か死にかけています。気づいたら沖に流されていたり、呼吸をするために岩の穴から首を出そうとしたら頭が引っかかって抜けなくなったり。そのときはもうダメだと思いましたが、傷を負ってもいいから生きようと、無理やり引き抜いたので顔面傷だらけになりました。でも、水中の生物たちも食物連鎖や激しい潮の流れといった世界でタフに生きていますよね。だから危機に対して非常に敏感だし、生き延びるためのさまざまな知恵というか、掟がある。それらを理解することはできないけど、人間には計り知れない秩序があるっていうことは分かる。そこで僕も一緒に居させてもらっている感じですよね。

某所の海

だから、僕にとって素潜りは「観察」じゃないんですよ。観察だと、自分が世界を対象として見ますよね。その間にカメラがあったり、水族館だったらガラスがあったりするわけです。でも素潜りは観察じゃないから、海水も飲み込むし、死ぬかもしれないし。もう、その中にただ居るっていうことですね。

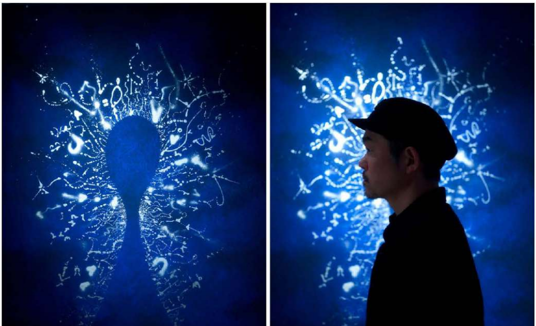
ーー観察ではなく「ただ居る」ことで人間と生き物の関係性が変わるのですね。

海に入ってすぐは魚が逃げていくんですけど、だんだんこちらの呼吸が深くなってくると魚も近寄ってきて、一緒に泳いでいる感覚になってくることがある。思い込みかもしれないですけど。

ーーそれはおもしろいですね。人間も生態系の一部になるというか。

はい。でもよく考えてみれば、旧石器時代の人などは全裸で潜って貝を獲って食べたりしていたわけですよね。僕は基本的に都市生活が好きですが、同時に海で貝を獲ったり、近くの山で野草を採ったりもします。それは狩猟採集民だった古代の人間と同じ行動をすることで、呼び起こされる感覚があるからです。普段はこういう水平な土地の上に人間が築いた社会の秩序の中で、物事を認識している。そういう状態から、現代社会のルールが通用しない世界に身一つで潜ると、忘れかけていた原始的な感覚にチューニングが合う瞬間っていうのがあって。僕にとって素潜りはそれを思い出す時間でもあるし、制作するときもそのチューニングで制作しています。

素潜りと発掘



ーー海に潜って、具体的にはどんなことをするのですか?

だいたい何かを拾っていますね。たとえばこれみたいに、穴の開いた石だったり、光るプラスチックゴミの欠片だったり、海には人工なのか天然なのかが判然としないものがたくさん落ちているんです。

海底で拾った石

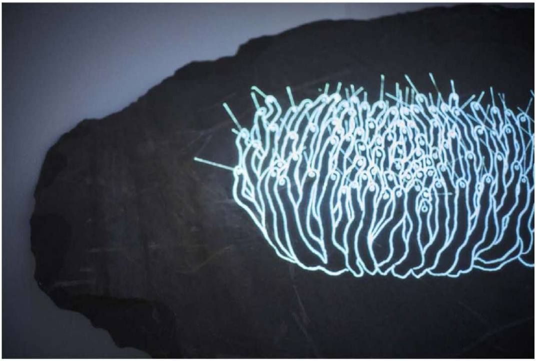
僕は生まれが宮城県で、父は福島、母は宮城出身という東北の家系ですが、2歳のときに家族で神奈川に引っ越して、川崎市で育ちました。その頃、住んでいた家の近くに縄文遺跡の発掘現場があって、僕も空き地で土器の欠片や、何だか分からないゴミのような物体を拾って遊んでいたんです。将来の夢は考古学者で、発掘少年でした。当時から地底都市とか世界の謎、みたいな本を読んでは想像を掻き立てられていましたが、水中の世界もいまだに解明されていないことだらけ、という意味では地中と同じ。だから僕にとっては、海に潜って何

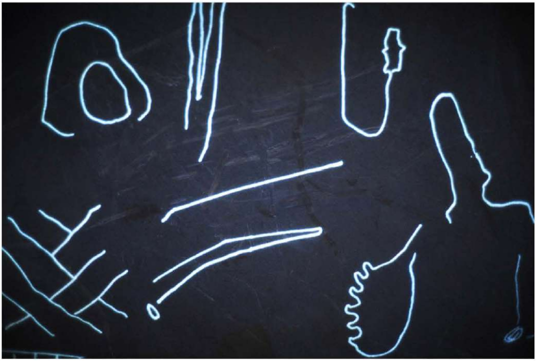
かを拾ってくるのは、発掘にすごく近いんです。

枝と海

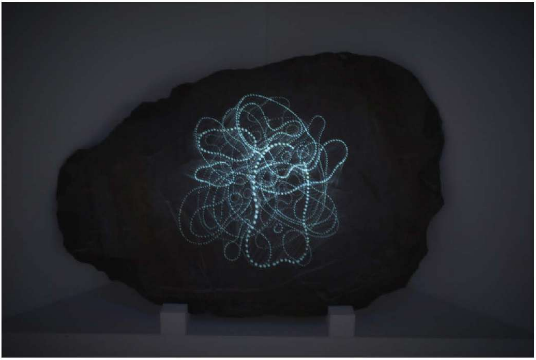
ーーヒラクさんにとって素潜りは、海で発掘をする行為なんですね。発掘の面白さを陸と海の双方に感じていたと。

そうですね。20～30代の頃は、バックパックで世界中を旅して、広い意味での発掘を都市でやっていたように思います。そもそも僕がやっているドローイングという行為には「引き出す」という意味があり、発掘と深い関係があります。すでにそこにある線の断片や解読できない記号なんかを都市から無数に引き出して、それらをつないで新しい作品を作ったり、アーカイブして『GENGA』という辞書のような本を出したり。たとえばインドの薬局の看板の一部が剥がれ落ちているところを描いたり、メキシコのマンホールの蓋を擦って記号を写し取ったりして、都市の浅瀬で素潜りをする感覚。ですが、2011年の震災があって、そういう都市でのフィールドワークが徐々にもっと深い自然の方へ向いていったんです。





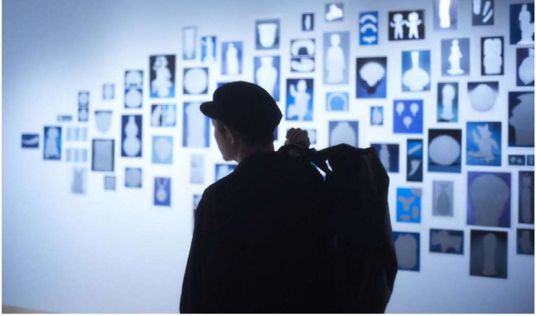
僕はルーツが東北なので、津波で街が流されて地形も変わってしまうくらいの被害を受けて、やっぱり僕にとっては他人事ではなかった。あれ以来、僕は直接的に津波や原発をテーマに作品を作ることはしなかったけども、自分の親族のお墓参りをしながら、東北や北海道の古い遺跡を周るようになって。古代の人たちが、脅威も恵みももたらす自然とどう向き合って暮らしを立ち上げて、生き延びてきたか。特に「祈りのかたち」ということについて、縄文の環状列石や壁画が刻まれた洞窟などを巡って、ドローイングしながら自分なりに考えるようになりました。以前はあちこちの都市で面白いものを表面的に集めていたんですけど、もっと都市が生まれる前の人間と自然との関わりについて深く知ることが必要だなと思えてきて。そういうことをフィールドワークするようになっていきました。



日常の些細な瞬間に採取した記号の断片を石板の表面に投影した作品《GENGA #1001-#1100》(video)

海に戻ってきた感じ

記号
鈴木ヒ
Hiraku Su
2025.4.25 Fri
POLA MUSEUM A



――近年では能登の地震でも海岸の地形が変わってしまいました。自然の風景は一見固定されているようですが、大きく動くものなんだと衝撃を受けました。

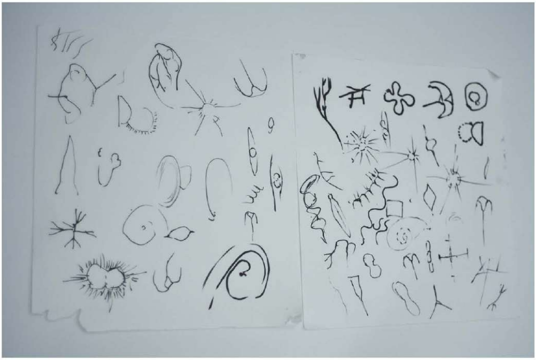
火山の噴火もそうですよね。ダイナミックで無慈悲な自然の動きの中にあって、人間が築き上げてきた都市は、生まれては消えていくようなすごくもろいもの。でも、だからこそ愛おしいというかね。大事にしたいものがそこにある。そういうある種、大きな循環の中に人間の文明や都市っていうものも織り込まれているんだっていう。すごく大きいテーマですけど、震災を受けて、そういうことを肌感覚として捉えるようになったというのがあります。

――自然の大きなサイクルで見れば、都市も人間もその一部に過ぎないというか。

はい。なので、都市でいろいろな記号の断片を採集していたように、自然界にある記号的な線により向き合うことで、文明の始まりについて考えるようになりました。溶岩を拾ってきてそれを並べながら描いたり、光の動きの軌跡をなぞったり、木の枝で線を引いてみたり。そうした流れで、海中生物、たとえばプランクトンの写真を見てドローイングをするようにもなって、今回の作品につながりました。だから今展覧会は、海に戻ってきた感じがしますね。

――海に戻ってきた感じ、ですね。今展覧会は青がテーマカラーですし、海中の微細な生き物を思わせる作品もありました。

これは今回の作品のベースにもなっているプランクトンのスケッチですが、文字のようにも見えるじゃないですか。最初のプランクトンって、35億年くらい前の地球の海で誕生した最も原始的な生命と言われていますけど、そういう生命の起源であるプランクトン自体が、そもそも人間には解読できない文字で何かを書いていたらどうなんだろう、ということを想像してみたんですよね。それで今回は、僕がプランクトンから文字を学びながら生命の物語を記述してみる、といったような作品になりました。



海のプランクトンを描いたスケッチ

ーー確かに、甲骨文字のように見えてきます。生物なのに不思議です。

フランスの科学者で写真家でもあるクリスチャン・サルデという人がいて、タラ号という海洋調査船の設立メンバーでもあるんですけど、彼は世界中の海でプランクトンの調査をして顕微鏡写真を撮っているんです。『美しいプランクトンの世界』という写真集があるんですが、そこには深海で発光している多種多様なプランクトンが登場します。それはもう、都市の高速道路とかネオンサインみたいにも見えてくるんです。生命の起源と未来の都市が重なってくるような感覚です。今回の作品は、この人の写真にもかなりインスパイアされています。

後編では今展覧会の作品の話を入口に、ヒラクさんの考える都市と自然についてうかがった。

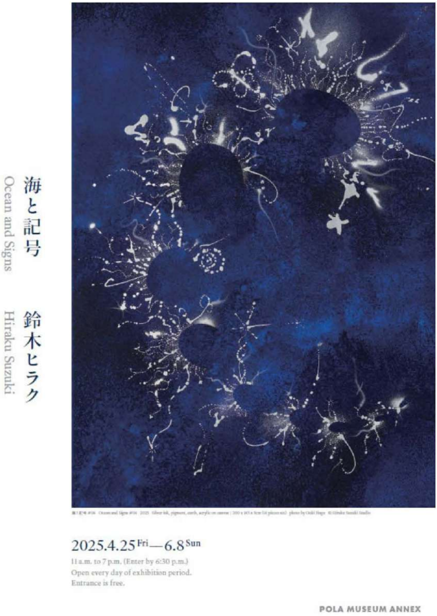
後編はこちら！

【後編】自然と人間って分け方をもうやめた方がいいと思う / 連載「作家のB面」Vol.33 鈴木ヒラク

#鈴木ヒラク #連載

Information

鈴木ヒラク「海と記号」


海と記号
Ocean and Signs
鈴木ヒラク
Hiraku Suzuki
2025.4.25 Fri — 6.8 Sun
11 a.m. to 7 p.m. (Enter by 6:30 p.m.)
Open every day of exhibition period.
Entrance is free.
POLA MUSEUM ANNEX

ドローイングの概念を拡張するような作品制作で知られる鈴木ヒラクによる、海をテーマにした個展。中心となるのは、作家がはじめてストーリー性のある作品に挑戦したという、青の背景にシルバーで描かれた16点組の連作「海と記号」（2025）。あわせて、考古学的遺物の写真をシルバーで塗り消すことで青の背景が浮かび上がる《Casting（Ocean）》（2025）や、新作映像インスタレーションも展示。海を介して、都市／人と自然の境界や関係性の捉え直しを試みます。

会期：2025年4月25日（金）～6月8日（日）
会場：ポーラ ミュージアム アネックス
住所：東京都中央区銀座1-7-7 ポーラ銀座ビル3階
公式サイトはこちら

【後編】「自然と人間って分け方をもうやめた方がいいと思う」につづく

ARTIST

鈴木ヒラク

アーティスト

1978年生まれ。2008年東京芸術大学大学院美術研究科修了。2011年ロンドン芸術大学チェルシー校に滞在後、アジアン・カルチュラル・カウンシル（ACC）の助成によりアメリカに滞在。2012年公益財団法人ポーラ美術振興財団在外研修員としてドイツに滞在。2023年文化庁芸術家在外研修員としてフランスに滞在。主な個展に『今日の発掘』群馬県立近代美術館（群馬、2023年）がある他、これまでに金沢21世紀美術館（石川、2009年）、森美術館（東京、2010年）、銀川現代美術館（中国、2016年）、MOCO Panacée（フランス、2019年）、東京都現代美術館（東京、2019-2020年）など国内外の美術館で多数の展覧会に参加。2016年よりプラットフォーム『Drawing Tube』を主宰。音楽家や詩人らとのコラボレーションやパブリックアートも数多く手がける。作品集に『SILVER MARKER—Drawing as Excavating』（HeHe、2020年）など、著書に『ドローイング　点・線・面からチューブへ』（左右社、2023年）がある。

VIEW DETAILS

Share

2025.05.28

【後編】自然と人間って分け方をもうやめた方がいいと思う / 連載「作家のB面」Vol.33 鈴木ヒラク

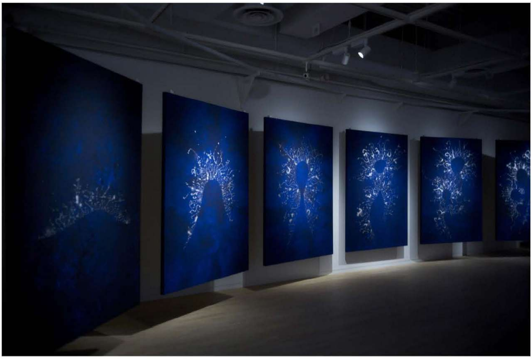
SERIES

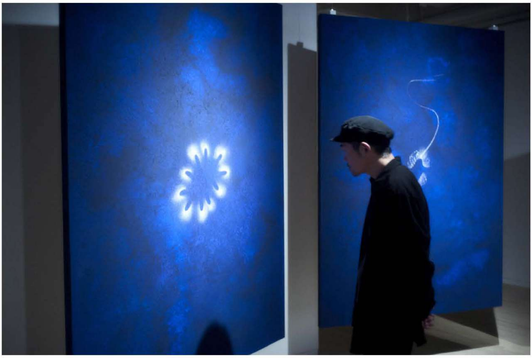
Photo / Saki Yagi
Text / Yu Ikeo
Edit / Eisuke Onda
Illustration / sigo_kun

アーティストたちが作品制作において、影響を受けてきたものは？　作家たちのB面を掘り下げることで、さらに深く作品を理解し、愛することができるかもしれない。連載「作家のB面」ではアーティストたちが指定したお気に入りの場所で、彼/彼女らが愛する人物や学問、エンターテイメントなどから、一つのテーマについて話を深掘りする。

鈴木ヒラクさんの「海と記号」展がポーラミュージアムアネックスで開催中。海をテーマにした作品群は、これまで都市の記号を採集していたところからの原点回帰でもある、とヒラクさん。そんな前編での話を踏まえて、後編では人と自然、あるいは都市と自然について、ヒラクさんの視点を掘り下げる。

すべてを包含する海





ポーラミュージアムアネックスで発表している16点の新作シリーズ「海と記号」の前から後編をお届けする

――今展覧会では、海の中を思わせるような大きな作品が円状に配置（「海と記号」）されていて、ストーリー性を感じました。

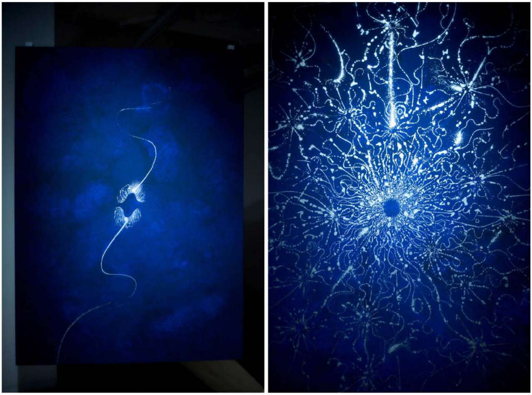
一つ一つの作品は、まず何かがうごめくような青い下地を作り、そこから光る記号を発掘するつもりで、シルバーのインクだけを使って即興で描いています。全体としては、海の中で生まれた生命が進化していく流れを意識しました。はじめに小さな波の揺らぎがある。そこから単細胞生物が誕生し、細胞が分裂したり、細胞同士が出会ったり、螺旋を描いたりして、最

前編はこちら！

【前編】海に潜り、原始的な感覚にチューニングを合わせて / 連載「作家のB面」 Vol.33 鈴木ヒラク

#鈴木ヒラク #連載

後また小さな波に戻っていくっていう。でも海は宇宙、細胞は星と言い換えてもいいんです。星が爆発するようなシーンもあり、ミクロな海中の世界とマクロな宇宙の物語が入れ替わりながらストーリーが続いていきます。1枚の絵が絵本のページにように一つのシーンになっていて、それぞれに前後関係があって16枚で一つの物語になる。そして、それらを歩いて見ながら脳内で映像的にモーフィング（ある画像から別の画像へと、連続的に変形していくCG技術）させていけるような展示空間づくりを試みました。

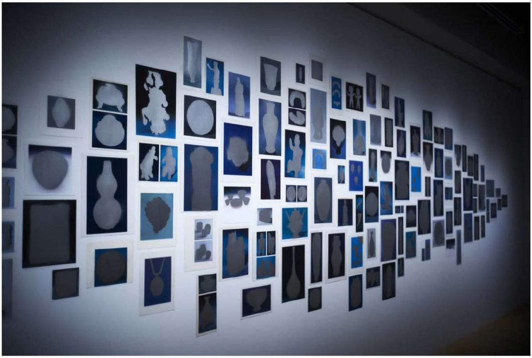


ーー生命が生まれ、さまざまに変化して最後は何もなくなる。そして、また振り出しに戻りたくなる感じがあります。

そうです。最後のシーンまできたら、はじめに戻る。そうやってぐるぐる循環していく。でもこれって海や宇宙の話だけではなくて。そういう大きな流れの中で、人間が文字や記号を発明して、文明を築いていくという人類の物語も織り込まれています。

ーーたしかに言われてみれば、前編であったように、プランクトンの形が文字にも見えてきます。青い背景とシルバーの組み合わせは「Casting（Ocean）」の作品群にも共通していますね。

古書店で見つけた博物館のカタログのページを切り抜いて作るシリーズです。長いこと続けていますが、今回は背景が青いものだけを集めて一つの集合体として展示しました。タイトルをCasting（=鋳造）にしたのは、古代の遺物の写真の輪郭をなぞって、切り抜いて、ステンシルを作り、そこにシルバーのスプレーを吹き付けるという制作方法が、鋳造の型取りや鋳込みという工程を、平面上で象徴的にやっているからです。鋳造ではネガとしての型に液状の金属を流し込むことでポジを作りますが、この作品でもネガ・ポジ反転によって過去の遺物が新しい物体として現れてきます。



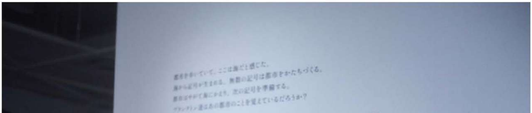
ポーラミュージアムアネックスで展示しているシリーズ「Casting（Ocean）」

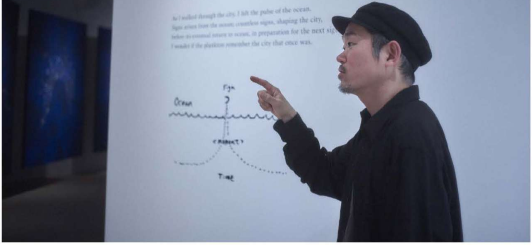
――青の背景に対して、シルバーの塗料で人工物らしき形が浮き出ている。海という有機的なものと人工的なものが不思議とリンクしているように見えます。

壺や人形といった遺物の影だけが残っているんですが、過去の記憶（物）を型として、新しい記憶がポコッと生まれる。実際、それぞれの遺物は中国、アフリカ、ギリシャなどと、その出自も文脈もさまざまですけど、それらがすべて光を反射する物体として現れてきて、背景は全部海のような青、という。文明というものは水辺、特に川辺などで生まれていて、必ず海に辿り着くわけですよね。作品の集合を通して、そういうあらゆる文明の起源としての海の記憶が見えてこないだろうかと思って構成しました。人間が作り出した遺物たちが、海に沈んでも海底でまだ光っているようにも見えるかもしれません。

「海と記号」にも「Casting（Ocean）」にも、人為的な記号の断片が無数にちりばめられている。その意味で、2つは結びついている作品です。

流動するものとしての都市



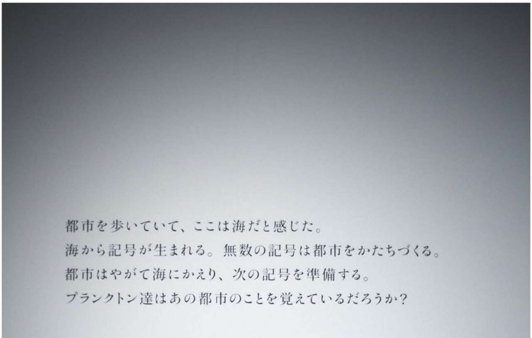


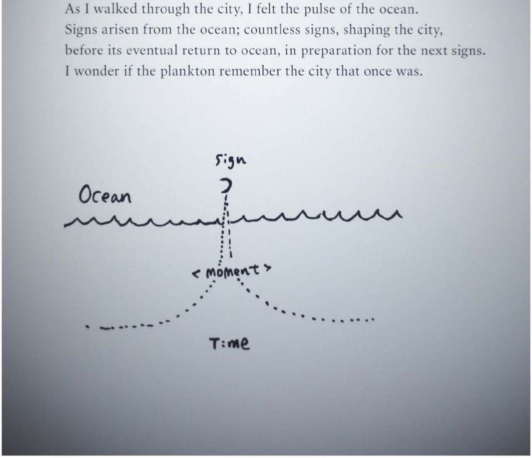
――会場入ってすぐのところに今展覧会のステイトメントと図形がありました。あの図形は何を示しているんですか?

去年の夏、タイの東北地方にあるパーテムという洞窟壁画を調査しに行った後に、バンコクに滞在していたんです。夜中にチャイナタウンを1人で散歩していたときに、あのダイアグラムを思いついて、近くの中華屋でパッと描きました。バンコクは20年以上ぶりでしたが、相変わらずカオスを感じました。やっぱり東京にしろ、ニューヨークにしろ、都市からどんどんカオスが失われてきている。それって、Google Mapsが地球外からの衛星画像で、もう地上を全部網の目状にマッピングしちゃって、均質化が進んだからとも言えるんですけど。特にコロナ以降は、都市を歩いてもワクワクしなくなってきたなっていう感覚があったんですけど、まだまだ細部を見ていけば都市にはポテンシャルがあると思いました。

――具体的に、多くの都市で失われつつあるカオスとは?

たとえば、チャイナタウンの音や光の濁流のような雑踏から横道に外れて、黄色い提灯がバーっと吊り下がっている小道に入っていくと、闇の中でいろんな魚介類やスパイスの匂いがして、小さな店がひしめいている角を曲がると、いきなり静寂の中に金色のお寺が現れて無数にろうそくが立っている、みたいな。そういうときの感覚は、海の底の岩陰で見たことのない生き物に遭遇するときに近いというか。奥へ奥へと進みながら発掘をしていく感覚ですよね。バンコクでは湿気とともに都市を漂流しながら、そういう平面上でマッピングしきれない空間と時間のうねりのようなものを感じて。そのときに、都市も海として捉えられるんじゃないかと思ったんですね。


都市を歩いていて、ここは海だと感じた。
海から記号が生まれる。無数の記号は都市をかたちづくる。
都市はやがて海にかえり、次の記号を準備する。
プランクトン達はあの都市のことを覚えているだろうか?



As I walked through the city, I felt the pulse of the ocean.
Signs arisen from the ocean; countless signs, shaping the city,
before its eventual return to ocean, in preparation for the next signs.
I wonder if the plankton remember the city that once was.

——都市の再発見は、海の再発見でもあったと。

そもそも僕たち人間を含めて生命は海から生まれたし、文明や都市は海からやってきているとも言える。そして、都市には海のような流動性がもともと備わっているんですよね。だから、ワクワクしながらダイブする感覚で都市を歩くっていうことを、久々に思い出したんです。

——都市の中に海のような流動性がある、という見方はおもしろいですね。

都市は無数の記憶や記号の集積だったりしますけど、ずっと続いていくものではないんです。かつて水没した古代都市もあるし、海からやってきて、海に帰っていったりする。都市自体を流動的なもの、むしろ一つの瞬間として捉えることもできるのでは。そんなことを図にしたのがあのダイアグラム。そこから「海と記号」というタイトルを思いついたんです。

チューブ＝抜け道を探す

――都市は一見、人工物ばかりのようにも思えます。だからこそ、そこに海を見出すのは興味深いです。

都市を顕微鏡で見たら、ビルの外壁は砂粒だし、アスファルトは化石燃料なので海中古生物の化石ですよね。僕たちはアンモナイトの上を歩いているのかもしれません。それに人間の内側にも野性が残っていて、理解できない感情の波もいっぱいある。それに気づくっていうことだと思うんですよね。だから都市においても、人間がすべてを理性的にコントロールできているわけではないし、むしろ都市をそういう流動的なものにしていった方が面白いんじゃないかと思います。

――逆に、開発や管理が行き届いた都市というのは、ヒラクさんにとってはつまらないのでしょうか？

でも、どんな都市でも抜け道は必ずあると思っていて。僕はこの世界に存在するさまざまな線をチューブとして捉えることで世界の見え方が変わるということを本でも書いた（※1）んですが、その見方をすれば、大都会でもビルの隙間なんかの些細な場所に、どこか別の場所と繋がるループホールが見えてくる。またこういう展覧会にも、チューブの要素はあると思うんです。銀座のビル群の中にあって、会場に入ると、ワームホールみたいな場があるわけじ

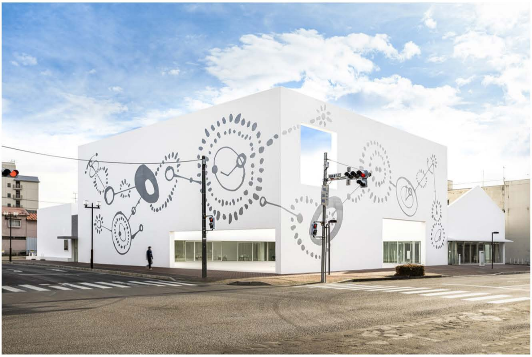
ゃないですか。だから、自分でそういうチューブを作り出すこともできるんじゃないかってことを、最近は考えますね。

※1……著書『DRAWING ドローイング　点・線・面からチューブへ』のこと。人の移動も、植物が伸びる成長も、イソギンチャクの触手の揺らぎも、目に見えるか見えないか、痕跡を残すか残さないかに関わらず、世界にはさまざまな線が描かれている、とするヒラクさんのドローイング論。

——チューブ的なものを探すだけじゃなくて、自分が作ってしまうこともできるという。

そうですね。都市を観察対象にするんじゃなくて、自分もそこにいる一つの生き物として、都市のあり方に働きかけることもできるんじゃないか、と。その可能性を考えたりしています。たとえば最近はパブリックアートを作ることが多くて。それこそ、都市の生態系に大きなインパクトがある。そこにあり続けることで、周囲の環境の変化を受け止めながら、環境そのものになっていく。都市に、そういう装置としてのパブリックアートを入れることで、今ここの利便性だけにフォーカスしている都市空間に、何か太古の記憶や未来の記憶みたいなものを引っ張ってくる通路を作り出すことができるんですよね。

《点が線の夢を見る》制作風景 2017年 大分市中央通り線地下道におけるパブリックアート作品 Photo by Yuji Takeki © Hiraku Suzuki Studio



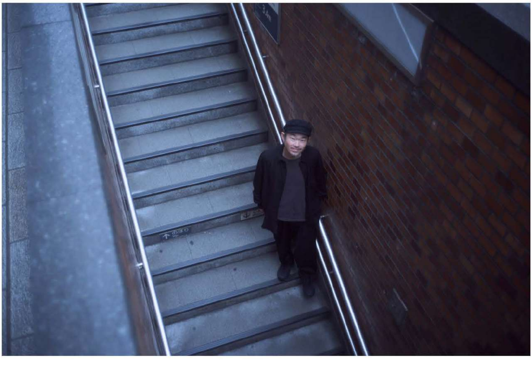
《光と遊ぶ石たち》2022年 十和田市地域交流センター（設計：藤本壮介）の常設壁画 Photo by Kuniya Oyamada © Hiraku Suzuki Studio

ーーパブリックアートにしかできないことでもありますね。

パブリックアートって保存は難しいけど、ゼロにはならない。壊されたり、上塗りされたとしても、層としては残っていくこともあるだろうから、それこそ何千年後とかに発掘されるかもしれない。僕にとって作品を作ることは、新しい遺跡を作ることでもあると思います。今、目の前の人間社会に対して作っているっていうだけじゃなくて、もっと過去とか未来だったり、人間以外との関わりが織り込まれているものを作っている感覚。

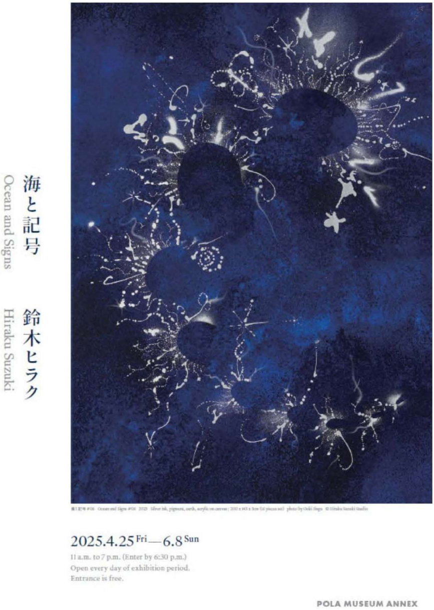
ーー都市の中で抜け道を探したり、自分で作ったりもできる。世界の見え方が大きく変わりそうです。

そうですね。都市と自然、人と自然みたいなざっくりとした分け方を、僕たちはしてしまいがちですが、もうやめた方がいいんじゃないかなと思うんですよ。本当はね。



Information

鈴木ヒラク「海と記号」


海と記号
Ocean and Signs
鈴木ヒラク
Hiraku Suzuki
2025.4.25 Fri — 6.8 Sun
11 a.m. to 7 p.m. (Enter by 6:30 p.m.)
Open every day of exhibition period.
Entrance is free.
POLA MUSEUM ANNEX

ドローイングの概念を拡張するような作品制作で知られる鈴木ヒラクによる、海をテーマにした個展。中心となるのは、作家がはじめてストーリー性のある作品に挑戦したという、青の背景にシルバーで描かれた16点組の連作「海と記号」（2025）。あわせて、考古学的遺物の写真をシルバーで塗り消すことで青の背景が浮かび上がる《Casting（Ocean）》（2025）や、新作映像インスタレーションも展示。海を介して、都市／人と自然の境界や関係性の捉え直しを試みます。

会期：2025年4月25日（金）～6月8日（日）
会場：ポーラ ミュージアム アネックス
住所：東京都中央区銀座1-7-7 ポーラ銀座ビル3階
公式サイトはこちら

連載「作家のB面」の記事一覧はこちら

作家の3面

ARTIST

鈴木ヒラク

アーティスト

1978年生まれ。2008年東京芸術大学大学院美術研究科修了。2011年ロンドン芸術大学チェルシー校に滞在後、アジアン·カルチュラル·カウンシル(ACC)の助成によりアメリカに滞在。2012年公益財団法人ポーラ美術振興財団在外研修員としてドイツに滞在。2023年文化庁芸術家在外研修員としてフランスに滞在。主な個展に『今日の発掘』群馬県立近代美術館(群馬、2023年)がある他、これまでに金沢21世紀美術館 (石川、2009年)、森美術館(東京、2010年)、銀川現代美術館 (中国、2016年)、MOCO Panacée (フランス、2019年)、東京都現代美術館 (東京、2019-2020年)など国内外の美術館で多数の展覧会に参加。2016年よりプラットフォーム『Drawing Tube』を主宰。音楽家や詩人らとのコラボレーションやパブリックアートも数多く手がける。作品集に『SILVER MARKER—Drawing as Excavating』(HeHe、2020年)など、著書に『ドローイング　点·線·面からチューブへ』(左右社、2023年)がある。

VIEW DETAILS

Share